

第3章 関係者の声 (復旧活動を振り返って)



早期の供給再開実現にご尽力いただいたすべての関係者の方々へ

前仙台市ガス事業管理者
大嶋 英世 様

東北地方太平洋沖地震発生時のガス事業管理者として、ご支援をいただいた皆様に御礼を申し上げる機会をいただいたことをまず感謝申し上げます。

平成21年に設立100周年を迎え、次の100年に向けて新たなスタートをしたばかりのときに、港工場が大変な被害を受けて、全面的な供給停止をせざるを得なかったことは、誠に痛恨の極みでありました。

都市ガスの供給を全面的に止めざるを得ず、大変なご迷惑をおかけしたことに對して、改めてお客様にお詫び申し上げるとともに、震災後の厳しい環境の中、また、4月7日の余震により再び供給停止などがあっても、辛抱強く都市ガスの供給再開をお待ちいただいたことに心から感謝申し上げます。

供給再開は、日本ガス協会のもと、全国の事業者の方々・関連する企業の皆様の昼夜を問わない復旧作業によるものであり、深く感謝申し上げます。新潟からのパイプラインでの天然ガスの供給に際しても、関係の事業者の皆様から格別のご協力をいただきました。

また、未曾有の震災にあって、特に関係省庁、地元の東北経済産業局、関東東北産業保安監督部東北支部、日本ガス協会をはじめ、自衛隊、報道機関の皆様から本当に懇切なるご指導やご支援をいただきましたことに、御礼申し上げます。

地震直後は、地震の規模から、まず3ブロックでの緊急停止を行いました。その後港工場が大津波に襲われ、仙台市ガス局が都市ガスやLNGを供給している県内の他の都市ガス事業者4社への供給を含めて、直ちに供給を停止せざるを得なくなりました。

港工場や導管網の被害の全体像がつかめないうちで供給を停止したことで、まず安全確保を最優先に、殺到するガス漏れ通報に對するともに、閉栓作業を行うべく直ちに準備に入りました。

再開の見通しが不明なままではありましたが、この時期

の対応がその後の復旧対策がスムーズに進む要因の1つになったのではないかと考えています。

また、ホルダー内の残ガスを活用して、非常用発電設備に都市ガスを利用していただいている病院等と葛岡斎場へは供給上支障のなかった中圧管を使用して可能な限り供給を続けることとしました。

宮城県沖地震、阪神淡路大震災や中越地震などこれまでの災害の経験を通じ、都市ガス事業者の災害対策や応援体制が整備されてきたことにより復旧作業が効果的に実施されたものと受け止めています。

マイコンメーターの設置、耐震性・耐腐食性に優れたポリエチレン管や強度の高い溶接鋼管の使用、供給区域のブロック化、LNGとパイプラインによる天然ガス受け入れの2系統化、そして全国のガス事業者による相互応援体制が円滑に機能したことなどがあげられます。

津波による被害は確かに甚大ではありましたが、これまで想定されてきた津波に複合的な対策等をとってきたことから、LNGタンクはほとんど無傷でしたし、コンピュータ室やコントロールルームもなんとか浸水を免れました。こうしたことでLNGでの製造再開を早期に決断できたものと考えています。

一方で、この大震災での経験から、港湾に建設せざるを得ないLNG基地や製造設備を大津波からどう守るかということが今後の大きな課題になると思います。

このたびの地震・津波の状況や被害の実態、事前の対策、復旧対策などについて多面的な検証が行われ、災害対策がさらに進むことを期待しています。

最後になりましたが、被災したにもかかわらず昼夜を問わず復旧作業に携わった職員や地元の企業の皆様、様々な困難にもかかわらずご尽力いただいた都市ガス事業者・関連会社の皆様、ご支援・ご協力いただいた全国の皆様に改めて心から御礼申し上げます。



仙台市ガス局様「東日本大震災復旧の記録」に寄せて

仙台復旧隊長
大阪ガス株式会社
導管事業部 京滋導管部 部長
石川 哲夫 様

仙台市ガス局様より本寄稿のご依頼を頂いた際に、11月末にLNG船第1船目の受入れがあると聞き、とても感激しました。まずは、主要設備が復興されたことを心からお喜び申し上げ、関係各位のご努力に心から敬意を表する次第です。

私はJGAからの依頼により仙台復旧対策隊の隊長として、3月14日から4月17日の解散式までおよそ1か月間仙台に行かせて頂きました。

到着日の夜にガス局様から被害状況と今後の対応方針等について説明を頂いたのですが、その状況は私の想像をはるかに超えるものでした。なぜなら、「ガス供給源がなかった」からです。

過去に阪神や中越をいろいろな立場で経験していましたが、供給源がないことは一度もなく、「導管の修繕と開栓をどう進めるか」だけだったのに、仙台では「供給源をどうやって確保するか、供給源がない中で何が出来るか」という全く新しい課題に取り組みなくてはならなかったのです。

難しい課題に業界全体が悩んだ期間でありましたので、関係各位のご奮闘により新潟からの高圧パイプラインからガスインして頂けるようになった時は非常に安堵したことを今もはっきりと覚えております。

次にとても印象に残っておりますことは、初めて家庭用の開栓が実施できることが判明した日のことです。

3月23日朝9時に高圧からのガスインを受けて、比較的被害が少ないであろう周辺部の泉区住吉台で、ガバナを稼働させて低圧導管の健全性確認をガス局メンバーで実施されました。

私は、今後の復旧全体の参考にもなるので現場まで見に行かせてもらったのですが、見事一発で復旧ブロック全体のガス圧降下はゼロ、つまり低圧本支管網の損傷は1カ所もなく翌日朝からすぐに開栓できることが判明したのです。

私もとても嬉しくて感激していたのですが、作業に関わった全てのメンバーを集められて挨拶をされた穴戸理事様が目頭を押さされたのを見て、思わず思い泣きをしてしまったことは一生忘れることのできない思い出になりました。

また、もう一つ忘れられない出来事は4月7日の深夜に発生した巨大な余震のことです。

23時半頃でホテルで就寝前だったのですが、ホテルの建物が倒壊するかと思うほどの強烈な揺れでした。大きな余震には慣れっこになっていた我々も怖いほどの揺れでしたので、すぐさまガス局様の対策本部に戻ったのですが、多数のガス漏れ通報を受けて緊急出動を差配しながらも再度停止する範囲を的確に決められていたことに大変敬服いたしました。

復旧隊全体にも「恐怖」という動揺が走った事態ではありましたが、最小限のロスで復旧が再度進んでいったことに業界の絆の強さを改めて感じることができた出来事になりました。

最後になりましたが、我々復旧隊が活動しやすいよう、宿泊・食事の手配から事務所環境整備等々まで数多くの献身的なサポートをして頂いた仙台市ガス局の皆様改めて御礼を申し上げて私の寄稿とさせていただきます。本当にお世話になり、誠にありがとうございました。